

いくつかの地名

Several place names

2019年11月11日 安田公男

URL : chinggis-ff

	項目
1	アブジア・コデゲリとラクダが原
2	ハリルトゥ湖
3	カラ・セウル河

はじめに

チンギス・カン時代の史料に出てくる地名には定説のないものが多い。これまで不明とされてきたものの内、チェクチェル山やキジル・バシなどの位置などについては既にこのサイトで報告した。今回さらにいくつかの地名の位置を提案する。

1. アブジア・コデゲリとラクダが原

この名は、①史集では「阿不只合濶迭格儿の地で冬を過ごした」、②親征録に「阿不禮闕惑哥儿の山に駐屯した」とあり、クイテンの戦いの直後の記述である。③秘史 187 節には、「ケレイト部族をかく滅ぼして、その冬、(チンギス・カンは) アブジア・コデゲリの地に冬ごもりした」とあり、また、④191 節には、「チンギス・カンは巻き狩りを中止し、アブジア・コデゲリから移動して、カルカ河のオルヌウ〔山麓〕に下営した」とある。村上はこの地の位置についての種々の説と、言葉の意味として、「アブジアというドーム型丘陵」「気候変化の激しい丘陵の地」の訳を紹介している。ペルレーはチョイバルサンの東南 47N115E にある Abchu 河としている。

この地は全てチンギス・カンの冬営地との記述である。1202 年と見なされるクイテンの戦い以降

の冬営地を考えると、「ケルレン河の大オールド」の地、即ち現在のアウラガ遺跡の場所としか考えられない。チンギス・カンが親族のジュルキン氏を 1997 年ごろに滅ぼしてから、その跡に移って本拠地とし、冬営地でもあった。二代目のオゴタイもそこが冬営地であった(1)。「アブジアというドーム型丘陵」の表現も現地の地形をよく表しているようである(2)。集史で、この地がオンギラト族の故地とあるのは、ジュルキン氏族の故地の誤りであろう。

④の巻き狩りを行っていたところがラクダが原であるが、冬営地のアウラガから南方にあったのではなかろうか。具体的な地点は分からない。

2 ハリルトウ湖

秘史 136 節に、「(ウルジャ河の戦いの時に) チンギス・カンの留守営はハリルトウ湖にあった。留守営に残った者を、ジュルキンがやってきて 50 人の衣服を剥ぎ取ってしまった。10 人を殺めた」とある。親征録には、「(ウルジャ河の戦いの) 時に、我が衆は哈連徒澤の間にいたが、ナイマン部人により襲われた」とある。元史には、「(ウルジャ河の戦いの後) ナイマン部に襲われた。これに報復するために、60 人を使わしてジュルキンから徴兵しようとしたところ、そのうち 10 人が殺され、50 人が衣服を剥がれて戻ってきた」とある。集史には、「(ウルジャ河の戦いにジュルキン氏族は来なかったが、それにもかかわらず) チンギス・カンは戦利品を分配しようとして人を使わした。その一行がユルキンの一部に襲われて 10 人が殺され、50 人の馬と衣服が奪い取られた」とある。

それぞれ内容が微妙に食い違い、留守営を襲ったのがナイマン部なのか、ジュルキン氏なのかははっきりしない。だが、この時から 3 年後、オン・カンと共に征討に向かった先がブイルクのナイマン部族であったことを考えると、チンギス・カンの留守営を襲ったのはナイマンであり、ジュルキン氏族は彼らの通過を黙認していたと言う構図が考えられる。ブイルクのナイマン部は、ハンガイ山脈の東部から北上してケルレン河の変曲点、即ち、ジュルキンの根拠地であったコデエ・アラルに容易に達することが出来る。そこから現在のアウラガの通過を黙認してもらってさらに北に進み、チンギス・カンの留守営を襲ったのではなかろうか。ジュルキンへの詰問使的な危険な使いであったから、60 人も的人数で向かわせたのだらう。集史のように、物資の分配というきれい事ではなかろう。

留守営の位置は、共同作戦を行ったオン・カンと合流しやすく、九峯の碑文があるセルベン・ハーガ近くにいると思われる金の本軍に行きやすい場所だったはずだ。そして、その近くには泉がなければならぬ。そのような目で現在の交通路を見ると 2 つの候補地がある。ジャルガルト(Jargalt)とアイルギン・エンゲル(Airugin-Enger)である。ケルレン河からジャルガルトまで 60km で、アイルギン・エンゲルまでは 110km ある。どちらとも判断がしにくいだが、当時のテムジンはモンゴル族の本拠地であるオノン河上流とホルホ河に勢力中心があったと想像するので、そこにより近い位置と、緑が多いことからしてアイルギン・エンゲルが留守営であったと判断したい。その南東 2.5km にある湖がハリルトウ湖だったと思われる。下図に移動経路を示した。

図1 1196年のタタル攻撃時のテムジン軍の移動経路推定

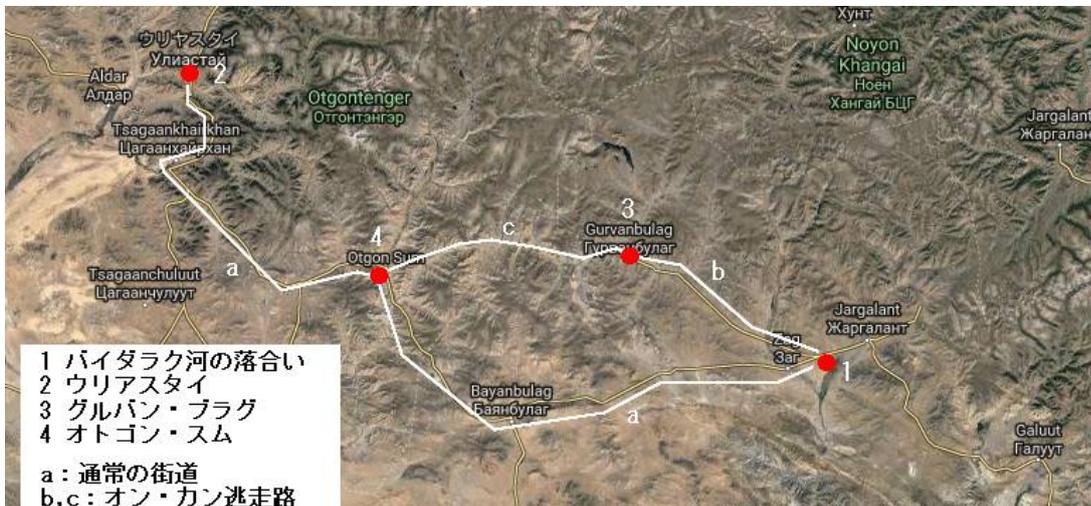


3 カラ・セウル河

1199年、テムジンとオン・カンはキジル・バシの地にいるブイルク・カンのナイマン部への侵攻作戦を行った。ブイルクをゴビに追いやって戦利品を携えて帰路についていたとき、バイダラク河の落合いでコクセク・サブラク將軍の迎撃を受けた。両軍は翌日戦いを始めることを約束して眠りに着いた。だが、オン・カン軍はテムジン軍を置いて夜中にカラ・セウル河を通過して撤退した。

ペルレーはこの河をバイダラク河北東のハル・スール河としている。下図の1の地点がバイダラクの落合だが、そこから北東に進むとハンガイ山脈の中に入り込んでしまい、帰路に目指すウリアスタイに向かうのが困難である。この方向に進んだとは思えない。考えられるのは、bでグルバン・ブラグ方面を目指す事である。現在の地図にはここまでしか道路表示がないが、その先のオトゴン・スムまで行けそうな河が続いている。cの経路にある河が、カラ・セウル河ではなかろうか。

図2 テムジンとオン・カンの撤退経路



以上

4 参考文献

<史料>

- 『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全訳、上、下」風間書房，東京
：村上正二(1970)「モンゴル秘史1，2，3」平凡社，東京
- 『集史』：『史集』(1983)，商務印書館，北京
：ドーソン著，佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史1」平凡社，東京
- 『元史』宋濂編：「元史」(1976)中華書局，北京
- 『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注，文求堂蔵版(1910)，国立国会図書館近代デジタルライブラリー
- 『長春真人西遊記』李志常：『十六国春秋』に収載の一(1966)，台湾中華書局

<研究書>

- (1) 白石典之(2001)「チンギス=カンの考古学」76-78頁，同成社，東京
- (2) 白石典之(2001) 前掲書 84-85頁

5 改訂履歴

2019年11月11日 初版作成